

## ワークシェアリングは江戸からも学ぶ

神戸大学経済経営研究所 小西 康生

兵庫県では震災以降の低迷する労働市場の打開に腐心してきたが、1999年の低有効給求人倍率の打開策の一つとして、政労使の三者協議に沿ってワークシェアリングへの取り組みが進められてきた。ここでは、短期的な労働市場の打開策のみならず、長期的な視点からワークスタイルやライフスタイルを構築するためのワークシェアリングも視野に入れている。

わが国における最近のワークシェアリングへの関心の高まりは、1970年代、1980年代後半に続く第3回目のことだという。しかし、江戸時代の「番勤め」などが、いま議論されているワークシェアリングの要素を含んでいる。ボランティア活動でもそうだが、ここでもこれらの先人の知恵を振り返ることも有意義ではなからうか。

家康以来の武断政治から文治政治へ転換があり、大名の取り潰しもあって、多数の浪人が巷に氾濫するようになった。しかし、慶安事件などの社会的不安の増大を経験して後は、過剰武士団を抱え込む方向に変化した。当時の武士階級の職務は世襲が中心であり、新たな職務の展開も乏しかったので、一つの職務を数人で担当するようになった。これが「番勤め」である。

江戸では休暇中の御家人がさまざまな内職をして、それらが自立する技術につながった。神坂次郎氏の著作でも有名な朝日文左衛門重章の『鸚鵡籠中記』では尾張藩の同様の様子が窺える。さらに、武士に限らず商家でも早期に隠居した人達が後世に残るさまざまな事業を成し遂げたが、これも早期退職制度の一例とも考えられる。